

北条と手を結んだ義堯には、最初に応じるこ
とがあった。

鶴岡八幡宮勸請。

そのための木材が、大量に安房から鎌倉へと
運ばれた。

義豊の御級もこのときに小田原へ運ばれて曝
された。このことから、里見氏は実質的に北条
氏綱に服従する立場に置かれていたことが、透
けて見える。

しかし、義豊討伐において、北条氏の加勢と
いう現実が大きかった。このことが早くも里見
家中で火種になろうとしていた。

それは、義堯が里見氏が一国の主として歩ま
ねばならない以上、避けては通れない必然的な
運命であった。

天文四年（一五三四）、関東管領山内上杉家に
政変が生じた。

幼少という理由で家督相続できなかった五郎
憲政は、一一歳のこの年に、上杉家臣団に擁立
されて家督奪取を実行した。

このとき山内上杉家の家督相続していた当
主・憲寛は、上杉家に養子となった足利高基の
子である。養子となったのちに憲政が誕生し、
おきまりの家中問題が上杉家に生じた。

が、幼年を理由として、憲寛が強引に家督を
相続した。関東管領の名のもとに、古河公方・
北条との親密な関係を築いたのだが、それは上
杉家臣団の望む形ではなかった。

彼らは、血統を純粹に重んじた。

結局は、それが秩序となる。

憲政により追放された憲寛は、兄である古河
公方・足利晴氏を頼って、上総国宮原へと移り
住んで、世に二度と出ることなくそこで生涯を
終えた。この宮原在住中に小弓公方・足利義明
の娘を娶って子を設け、後年、その子孫は宮原
氏を称して徳川の時代を生きることとなる。

さて、上杉氏の内乱を皮切りに、関東随所
で、骨肉の争いが展開された。

真里谷武田氏においては、棟梁である信保が

子の信隆に家督を奪われた。この頃の信保は、
足利義明ともしっかりしていなかった。それは
まるで、晩年の、歯止めが利かぬ、孤独な年寄
りそのものであった。その憤懣のなか、天文三
年に信保はこの世を去る。

信保が小弓公方と仲違いしていたことを口実
に、後継者である真里谷丹波守信隆は、里見氏
を誘い、北条氏綱との関係を密にしていた。

天文四年一〇月、里見義堯は北条氏綱に誘わ
れ、武蔵国河越出兵の加勢として兵を差し向け
ている。この義理は、もはや果たさねばならな
い鎖のようなものだった。北条氏がいたからこ
そ、里見義豊を討てたのだということは、大な
り小なり、ゆるぎない事実なのである。

ただし北条氏との関係が良好であることは、
江戸湾をめぐる制海権争いの休息を意味してい
た。領民たちは海賊に襲われる不安から解放さ
れ、漁に精を出していた。

と同時に、北条との良縁は、小弓公方との疎
遠を意味する。

しかし、義堯は、どこかで杞憂していた。
（ほんとうに、このままでよいのだろうか）
と。

里見権七郎義堯が、その称する位階を

「刑部少輔」

と称したのは、当主となったこの頃のことであ
る。里見を継いだ者なら称するべき位階は

「民部少輔」

である。

「わたしのことなら、お気になさらずともよい
のです」

そう云うのは、里見又太郎だった。

「遠慮ではござらん。これは筋道と信義のこと。
理由はどうあれ、嫡流を滅ぼした者が民部少輔
を冠する罪は、あつてはならぬことです」

「しかし」

「この位階はあなたのもの。又太郎殿が称する
ことを望みます」

「それは困る」

「ならば、こうしましょう」

「は？」

「里見家を継ぐ者として、僕は、里見又太郎に民部少輔の冠を与える」

「……！」

「お受けくださるな」

これ以上なにもいえなかった。これより、又太郎は民部少輔を名乗り、義堯の影に徹しながら、内政の要として生きていくことを決意するのである。

十
十
十

明日への飛翔（1）

夢酔 藤山